デュルケームとドイツ

小関藤一郎

1

デュルケーム E. Durkheim にとってドイツは重要な意義をもっている。それは彼の生涯にとってもそうであるし，またその社会学思想にとってもそうである。それはたんに重要な意義というよりは，彼の生涯にとっては悲劇的な意味さえもっているともいえるのである。デュルケームとドイツの関係は今日はじめてとりあげられる問題なのではない。それは従来からも多くの研究者によって重要さを指摘されてきたところである。しかし，最近のデュヴィニョォ J. Duvignaud の著作において晩年のデルュケームにおこった悲劇的事件が報ぜられており，これに関して筆者が1964年11月滞仏中，ボルドオでその当時同大学を退職されたばかりの前教授ラクローズ Lacroze 氏から頂いた資料にもその事件の結末の報道がある。しかもそれは彼の死とも非常に深い関係があるものであり今まで知られていなかったことであると考えられるので，この事件のことを誌しておきたいと考えたのであるが，これを機会にドイツとデュルケームの関係を全体的に回顧してみることが意義あることと思われてきた。そこで以下，主として年代順にのそ関係をたどりながら，デュルケームがおかれていた位置，外国生れのユダヤ系学者のフランスにおける位置を考えてみることとしたい。

2

デュルケームは周知のように1858年4月15日フランスの東部，ドイツ国境に近いヴォージュ県のエピナル市で生れた。ここはドイツとフランスの戦いのたびにどちらか戦勝国の領土となり，百年の間に何度も国籍をかえさせられたアルサスに直ぐ接したところである。Durkheim という名前もすでにドイツ的なにほいが強いのであるが，父はユダヤ教の教師であったのである。彼もそうした生れから父の仕事の後をつぐべき状況におかれていたようで早くからヘブライ語の勉強をし旧約聖書やユダヤ教法典 (Talmudic) の研究をはじめていた。しかし比較的年少の頃，デュルケームは宗教家として生活することを断念し，学業に専念することに大きな関心もち出した。エピナルでコレージュ Collège おえるとパリに出，有名な師範大学 Ecole Normale Supérieure にいったのであるが，ここで彼は多くのすぐれた教師，友人に出合うこととなり，それらの人々から深く，強い影響をうけるのであるが，とくにデュルケームが心から尊敬し，ひきつけられた教授として著名な，ドクーランジュ Fustel de Coulanges および哲学者ブートルー E, Boutroux があげられるのが常である。事実際デュルケームもそのラテン語の論文モンテスキュウ論をド・クーランジュ教授に捧げ社会学の講座新設に大きな役割を果たした学位論文「社会分業論」De la division du travail social をブートルー教授に捧げている。しかしこの二人のほか両氏に劣らずデュルケームに大きな影響を与えた人にルヌヴィエ Renouvier がある。ルヌヴィエはフランスにおける新カント主義者であるが，彼の著作をデュルケームは徹底的に吟味，分析したようである。デュルケームの弟子モーブラン R, Maublanc は師がいかにルヌヴィエの教訓を深く心に銘じていたかを次のように語っている。

「はじめて私がデュルケーム先生を御宅に訪問したとき，師は私にこういわれた。〃もし君が君の思想を成熟させようと思えば，偉大な教師を詳細に深く研究することに専心せよ。そしてその体系を分析して，そのもっとも内面的秘訣までも明かにするようにすべきである。これは私の師ルヌヴィエー先生の教えであるが，私はそのとおりやってきた〃 1) と。この言葉はいつも私の脳裏

からきえることはない。」

ルヌヴィエとの接触は直接ドイツとの邂逅ではない。しかし，ルヌヴィエを研究しようとすればカントを深めることなしにすますことはできない。デュルケームはここに師ルヌヴィエを通じてドイツ哲学との接触をもったばかりでなく，大きく影響されたのである。デュルケームはカントを深く研究した。カント的な考え方がデュルケームの思想形成に及ぼした影響は非常に大きいといわなければならない。デュルケームにおいては，分業の研究にせよ，自殺，教育の研究にせよ，道徳意識，倫理的関心がその根底に存在しているが，そうした関心，考慮はルヌヴィエに培われたものであるが，窮極的にはそれはカントの人格尊厳の道徳哲学につながるのである。カントのデュルケームに対してもつ意義はそれだけにつきるのではない。デュルケームはカントの批判哲学を学ぶことによって，カントに対して批判的態度をとり，カントにおける現実の社会的局面無視に対して反駁し，道徳問題に対して異った方向づけを与えることになったのである。ブーグレ C, Bouglé はデュルケミスムはカント主義を修正し，それをコント主義で補ったものであるといっている[2]が，カントはデュルケーム思想の非常に大きな支柱の一つである。カントに対するデュルケームの批判は「道徳的事実の決定」Détermination du fait moral. においてはつまりあらわれているほか，最後の著作，「社会学講義」 Leçons de Sociologie においても相当大きな部分をしめている。そればかりでなくフランスの哲学会主催の討論，「性教育の問題」[3]における彼の発言にはカント的な厳粛な倫理観の明白な反映が見られるのである。

ここまでのデュルケームとドイツの接触はまだ間接的なものであった。しかし，まもなくドイツとの直接の接触がはじまる。つまり，デュルケームは大学卒業後，大学教授職資格 agrégation をとり，リセー教授の経験を経たのち，ドイツに留学することになるのである。それは1885～1886年である。ドイツ滞在の目的は（1）ドイツ大学における哲学教育の方法と内容の研究調査，（2）ドイツにおける社会科学研究の現状研究の二つであった。[4] このドイツ訪問についてデュルケームは事前に当時高等教育局長であったルイ・リアール氏 Louis Liard と相談していたるが，リアール局長は社会生活についての科学的研究の必要を強く熱心に主張していた人[5]なのである。ドイツ訪問の以前すでに，デュルケームはシエフレ，グンプロヴィッツなどドイツ社会学者についてはすでに研究をしており，それらの学者の著作についての書評を発表している。中でもグンプロヴィッツの社会学要綱 Grundriss der Soziologie に関する書評においては，コントにより命名されフランスにおいて誕生を見た社会学，すぐれてフランス的学問である社会学の研究が最近ではむしろドイツにお株をとられた形になっていることを慨嘆する言葉を発してさえいる。ドイツの社会科学に対する関心はそういうことからも，デュルケームにおいては愛国的な気持とも結びついていたのである。

さてドイツを訪れたデュルケームは数ケ所の大学を訪れ調査を行ったが，一番長く滞在したのはベルリンとライプチヒであった。とくにライプチヒでは当時心理学者として国際的に盛名を馳せていたヴントにひかれていたし，またヴントの考え方，研究方法は強く彼に印象づけたのであった。ドイツ滞在中の調査報告[6]をデュルケームは「ドイツ大学における哲学教育現況」[7]および「ドイツにおける道徳の実証科学」[8]と題して発表している。とくに後者において彼はドイツにおいて道徳的事実の実証科学が独立学科として経済，法律研究などとならんで教授されている事実とその基本的原理について詳しく報告しているが，そうした学科担当者としてデュケームはワグナー Wagner，シュモラー Schmoller イエリング Ihering ヴント Wundt およびポースト Hermann Post をあげてそそれらの基本的考え方を報告している。そうした研究が直接，間接にデュルケームに大きい刺戟と影響を与えたことは確実で，彼自身道徳生活に対する科学的研究を終生の仕事としてこれに献身したことはドイツにおける研究の影響であるといえるであろう。ドイツにおける研究の与えた影響はこうしてデュルケームの研究および生涯に対して決定的なものとなるのである。

ドイツから帰国すると間もなく，デュルケームはボルドオ Bordeaux 大学に招かれ，1887年フランスの大学ではじめて社会学の講座を担当し，15年滞在住の後1902年にはパリ大学に移りここでも

社会学の講座をはじめて開設する栄誉をになったのである。そして彼はフランス社会学の指導的，中心的人物として盛名をはせたのである。この間彼は実証的道徳科学を樹立しようとはかったのであるが，それはカトリシズムが公教育から手をひいた後の国民の精神的動揺と混乱を救うことのできる新しい世俗的道徳を確立することを最大の急務と考えたからなのである。しかも彼はユダヤ教教師を父とする身でありながら，こうした重責を荷ったばかりでなく，すぐれた理論的考察と弁証法的論争力をもってこの任務を着々として実現していった。このことは彼に対する反対勢力を，とくに保守反動派の中に強い敵対勢力をつくることになったのである。ドプロワージュは「道徳と社会学の葛藤」 Le Conflit de la Morale et de la Sociologieにおいてデュルケームの思想はフランスの伝統に沿うものではなくて，「ドイツ製」 made in Germany であるという酷評を下している。ドプロワージュのこうした批判はデュケームに対する偏狭な保守派の勢力からの批判の代表であるとみてよいであろう。国の内外においてフランス科学の名を高め，世俗的合理主義精神の確立に努力してデュルケームにはこうした思わぬ伏兵がひそんでいたのである。とくにそうした反対派の感情を刺戟したのはデュルケームがジャン・ジョーレス Jean Jaurès などと手携えて，ドレフェース事件のときに立ちあがって行動をおこしたことであったと推測される。この時デュルケームは「個人主義と知識人」 L'Individualisme et les intellectuels [9] を書いて，フランス革命の精神である個人主義を守るため，知識人の役割を強調し，ドレフュース事件そのものを表面的には名ざさないが，「軍部の要請によって市民が何等正当な裁判の手続きによることなく，処罰されることは看過すべきではない，知識人は革命の伝統精神，個人主義を守るため立ちあがるべきである」[10] と訴えている。この時デュルケームはフランス軍部を明かに敵としていたのである。デュケームの敵対勢力の主要なものにはこうしてカトリック教会と軍部がふくまれていたのである。フランス革命の精神を強調しているデュルケームではあるが，それは決して階級斗争という見地からではなく，祖国フランスの合理的，世俗的な発展をねがった立場に立ってのものである。だから1908年フランス哲学会主催の討論会「平和主義と愛国主義」[11] における発言においてもデュルケームは国家の存在意義とその道徳的使命を強く主張し，感情的理想論に近いような国際主義の根拠が薄弱であることを鋭くついている。すでに道徳教育論(1902～1930年ソルボンスでの講義）においても道徳教育は愛国主義と結びつくべきであり，科学的にもそのことは立証されるとのべた立場はここでも依然として固持されている。デュルケームは一面これほどまでにフランスに深く愛着していたのである。そうしたフランスへの愛着はフランスの文化的伝統ローマ，ギリシャ以来の人類の文明の後継者であることを自任する伝統的フランス文化への愛着でもある。フランス文化の欠点，フランス国民性の弱点に対する指摘も根本的にこうしたフランスへの愛着に根ざしているものである。最後にデュルケームはプラグマテイズムと社会学を対決させ，[12] 合理主義の伝統をうけつぎその正統の後継者である社会学はプラグマテイズムよりも更に近く真理に接近することを可能ならしめる，しかもそれは生た真理を全面的に把握することを可能ならしめるのであるとして，社会学の卓越性を擁護しているが，こうした論争もフランス文化がアメリカのプラグマチズムには劣ることない力動性 dynamisme をその中に包蔵していることを明かにすることを目的としたものである。フランス文化に対する深い誇りと強烈な愛国的精神がはたらいているのが看取される。こうした態度をもっていたデュルケームは第一次大戦がはじまるや間もなく祖国のために献身的活動を開始した。愛息ドアンレ(André)を戦場に送ったばかりでなく，1915年には「戦争を欲したのは誰か」Qui a voulu la guerre？と題する小冊子を著わし(E, Denisと共著）ドイツ外交文書の調査にもとづいてドイツがいかに戦争の準備をしていたかを明かにしている。それはフランス人に対して今度の戦争はドイツの全く計画的な準備の下に行われたものであることを周知せしめ，こうした不正に対して祖国を防衛するため戦うのは正義に味方するものであることを訴えたものである。そこにはドイツのこうした暴虐的行動に対する強い憤りが感じられるのである。また同じ年，彼は「万国に冠たるドイツ」

Deutschland über Alles というドイツ人の心性を攻撃した冊子 "L'Allemagne au de ssusde tout" をかいて，ドイツのこうした思いあがりは永続きはできないと説いている。これもこの戦争がフランスにとっていかに防衛的なものであって，しかもフランスは人類の正義のためにドイツに抗していかなければならないかを訴えたものである。

前戦でドイツ兵と戦うフランス兵と同じような気持になって，デュルケームは祖国の大義を証明することに努めたのである。同時にそこに彼は不正なドイツの優勢は長くはつづかないという点を強調して，連合軍側の銃後の人々を慰安，激励もしているのであるが，そうした活動は更にその次の年1916年になっても続けられた。この活動の成果となってあらわされたのは「全フランス国民への手紙」Lettres á tous les Français である。この手紙は「全フランス国民への手紙刊行委員会」の仕事としてなされたもので委員長はアカデミー・フランセーズのラヴィス Lavisse 氏でデュルケームはその書記役を担当していたのであるが，この会にはパリ大学教授のドニス Ernest Denis, ランソン Gustave Lanson, セニョボス Charles Seignobos やベルグソンH. Bergson(フランス・アカデミー) コレージュド・フランスのベディエ教授 (Joseph Bédier) メイエ教授 (Antoine Meillet)なども委員として加わっていたのである。この書の刊行目的は第一次大戦で独軍の緒戦における華々しい速攻の戦果にまどわされて，前途に対して大きな不安を抱いていた人々の動揺を抑え，各戦線における正しい情報を提供することによって連合国側とくにフランス国民の忍耐と格段の努力を要望することにあったのである。同書の緒言において，委員会は次のようにのべている。「1915年7月，東部戦線においてロシア軍がポーランド以東に退却したことは，仏国民に大きな動揺をひきおこし，ロシア軍が将に全面的に崩壊する直前にあるのではないかという不安を与えていた。委員会のわれわれは連合軍勢力の優勢がいつか必ず敵を圧することを確信していた。しかしそうした確信の理由をフランス国民全体に理解してもらい，国民の協力と一層の奮起を要望したい。マルヌの戦線でも連合軍は連戦速決を目ざす独軍の進撃を阻止した。今や連合軍はその軍勢をたて直し新に攻勢に転ずる時間的余裕も得た。こうしたことと同時に各戦線における独軍の劣勢を知らせ，国民の希望にしっかりした基盤を与えたい。日々の戦況報道によってたえず緊張している国民の感情は非常にいら立ち易くなっている。しかし長期戦で大切なのは一時的の状況とか一時の戦局だけではなく，戦争の基本的原因と戦争に対する備えという基本的な戦力である。それらを明かにすることによって国民の士気を鼓舞するとともに最後の勝利を目ざしこの忍耐を求めなければならない[13]。」こうした意図によって刊行されたこの書において，デュルケームは序文「忍耐，努力，信頼」Patience, Effort, Confianec をはじめ，トルコ，ブルガリアにおけるドイツ同盟軍の敗戦状況，フランス軍の立ち直りと攻撃展開状況，軍需産業の進捗状況の報告などの執筆を担当している。祖国フランス——人類の正義の権化としての——に対する無限の信頼とこの祖国防衛に対する熱烈な気魂がそこに脈うっているのが感じられる。デュルケームは傲慢なドイツと対比してフランスにフランス革命の精神である個人主義をまもる人類の良心実現の任務をおわしめている。第一次大戦当時フランスの知識人が大部分そうした気持をもっていたのであろう。それはデュルケームだけのものではなかったにちがいない。しかし，デュルケームはそうした気持を行動にあらわす点において率先していたのである。

この戦時中のデュルケームの言動にはドイツの独善主義，傲慢さに対するはげしい非難が多く含まれている。しかし，彼はドイツ国民の長所といえる点に全く眼をとぢていたのではなかった。「道徳的教育論」L'Education Morale ——1902年ソルボンヌにおける講義がこの書のもとである——において，彼はフランス人の余りにもいきすぎた個人主義，集団的訓練の欠如と対比して，ドイツ人の集団的行動の訓練ができている点を賞賛している。また「フランス教育思想史」においても17世紀にみられるフランス国民性の本質的欠陥である過度の単純主義，類型化的傾向を指摘し，それに対する教育の変革の必要を論じている[15]。そうした点からみてデュルケームがたんなる chauviniste であるとみることはあやまりである。彼は彼自身の表現によれば「静粛な愛国主義」の実践者であったのである。だから戦時中のドイツに対

する非難は決して学問，文化に対するそれではなかったのである。

3

ところが，こうしたデュルケームの愛国的活動にもかかわらず，彼を心から悲しませる事件が戦争の末近くにおこったのである。それはフランスにおいて世俗的，合理的道徳をうちたてようとして献身的に活動したデュルケームの真執な努力に対する敵対勢力の卑法な反撃である。大戦によって彼は1915年その愛息，若いノルマリアン（normalien）André をサロニカ戦線で失ったばかりでなく，学生時代からの無二の親友ジャン・ジョーレス Jean Jaurès. を暗殺によって失っていたく非嘆にくれていたデュルケームに思いもよらぬ中傷がなされたのである。それは一上院議員が裁判所に対して「この外国系フランス人，ソルボンヌの教授はドイツ軍部のまわしものの疑いがある」から，多国人に対する居住許可をとりあつかう委員会がとり調べて，このの外国人に対する居住許可を取り消すように命ずべきであると告訴した事件である[16]。正義の国フランスに心から愛着を感じ，強い一体感をもっており，しかもその栄光擁護のため献身したデュルケームは，この訴への報に接して，何という感慨に沈んだことであろう。祖国への献身がこんな形で報いられるとは何という運命であろうか。ことに二人の親しい人を失い，献身的活動で疲れきったこの愛国者にとって何という冷酷な運命のめぐりあわせであろう。この大きな痛手はおそらく彼の死期を早めることにも作用したに相違ない。しかしこの訴えがそのとおりにとりあげられたとすれば問題は一層大きなものに発展したはずであろう。また祖国の栄誉と発展に対して深い無限の信頼を抱いていたデュルケームは永久にうかばれなかったであろう。幸いなことに，この上院議員の訴えは裁判所で取り調べの結果，事実無根であることが明かにされ，デュルケームの死の直前に彼に着せられかけた汚名は全く一掃されたのである。デュルケームのこの告訴についてふれているデュヴィニヨォ氏の著者にも何故かその結末はふれられていない。これについてふれているのはボルドオの新聞だけである。筆者はボルドオ大学の前教授ラクローズ Lacroze 氏からデュルケームに関する若干の資料を頂いたが，それによって寃罪のはれたことをで知ったのである。ドイツとの接触によって新しい多くのものをとりいれ，祖国のため奉仕してきた合理主義者が，そのにくんでいたドイツ独善主義の手先きという嫌疑をかけられたことはデュルケームにとって大きな悲劇であるばかりでなく，第三共和制下のフランスにとっても大きな悲劇である。われわれはこうした事件を通じて，フランスにはじめて根をおろした社会学の生長，発展がいかなる大きな抵抗と斗っていかなければならない運命を背負わされていたかを知るのである。フランス社会学の歩んだ途はそのすぐれた業績によって一見考えられるような平担なものではなかったことを知らなければならない。と同時に，大革命後百年以上を経た時期においても，フランスにはなおも根強く反動勢力が暗躍していたことを改めて思い出してみることが必要であると思われるのである。

注 1) R. Maublaue, "L' Oeuvre sociologigue d' E. Durkheim" Europe, XXII (1930) P 77—82
2) C. Bougle', Préface de Sociolgie et philosophie (de Durkhein)
3) Discussian sur "L' Education Sexuelle",Bulletin de la Société Française de philosophie XI (1911)
4) H, Alpert, Durkheim and his sociology P 38
5) H, Alpert, P38
6) Revue philosophigue XIX p .84—101,およびp. 627—634
7) La philosophie dans les universités allemandes (Revue Internationale de l'Enseignement. XIII pp. 313—338, 423—440)
8) La science positive de la morale en Allemagne (Revue philosophique XXIV. pp.33—58, 113—192, 275—284.)
9) Revue Blue 4e Série, X (1898) p.7—13
10) idid.,
11) Discussion sur "Pacifisme et Patriotisme" (Bulletin de la Société Française de Philosophie 1908.)
12) Pragmatisme et Sociologie.
13) Lettres à tous les Français,
14) L' Evolution Pédagogiqne en France 2 Vols.
15) 拙訳，フランス教育思想史 下　第8章 P. 202—203
16) J. Duvignaud, Durkheim, sa vie, son oeuvre, 1965. P. 11.